ワイド特集

フルスイングな人たち

本誌独占

直撃「集団的自衛権は想定外」

政権が依拠する「72年政府見解」作成の元法制局長官(94)が激白

安保関連法案の致命的なほころびが、また一つ明らかになった。

安倍政権が集団的自衛権行使容認のよりどころとする、内閣法制局作成の「1972年政府見解」(以下、「見解」)。作成に携わった幹部でただ一人存命の角田(つのだ)礼次郎・元内閣法制局長官が、本誌の直撃に長い沈黙を破った。

当時、田中角栄政権で憲法解釈を担当する法制局第一部長として「見解」の作成に関わり、その後は最高裁判事などを歴任した角田氏。「見解」について、こう明言した。

「集団的自衛権をいささかでも認めるなどという考え方は、当時は全然なかった。与党、野党、内閣法制局を含めてね」

8月13日、都内の自宅で取材に応じた角田氏。転んで痛めたという左腕のギプスが痛々しかったが、口調は明快だった。

「40年以上前のことだから」とこれまで取材を断ってきたというが、自身の印鑑も押された手書きの「見解」の写しを見せると、ポツポツと胸の内を語り始めた。

「重大な案件なら、総理や官房長官との間でも議論になるし、さすがに覚えているはずだが、記憶にない。当時はあまり問題にならなかったんでしょう。集団的自衛権が何らかの形で認められるなんてどう考えてもなかったし、そういう主張をした人もいなかった」

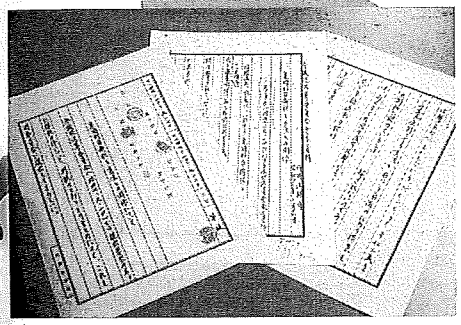
記憶にないのも無理はない。「見解」は、集団的自衛権の行使はできないという従来の憲法解釈を述べたものにすぎず、目新しいものではなかったからだ。

ところが昨年、42年ぶりに「見解」を〝発掘〟した安倍政権は、ここに集団的自衛権の行使を限定容認する考え方が含まれているという、真逆の主張をし始めた。元総務官僚で、国会でこの問題を追及してきた民主党の小西洋之参院議員が解説する。

「『見解』には『外国の武力攻撃によって国民の生命、自由及び幸福追求の権利が根底からくつがえされる』場合に自衛のための措置が容認されると書かれている。『外国の武力攻撃』が日本へのものと明言されていないことに目をつけた安倍政権は、同盟国などへの攻撃も日本の自衛の措置の対象に含まれる場合があると主張しているのです」

こうした安倍政権の理屈を説明すると、角田氏は苦笑してこう切り捨てた。

「横畠(裕介・現法制局長官)君がそう言っているの!? そういう分析をした記憶はないし、そういう理解はなかったと思いますね。



「集団的自衛権の行使は容認しない」と明記した「1972年政府見解」の原本の写し(小西議員提供)。角田氏の印も押されている

角田氏(96年撮影)は法制局長官時代の83年、国会で「集団的自衛権の行使を認めたいなら、憲法改正という手段をとらざるを得ない」とも答弁している

ここに書かれている『外国の武力攻撃』は、日本そのものへの攻撃のことです。日本が侵略されていないときにどうなる、なんて議論は当時なかった。これを根拠に解釈改憲なんて夢にも思っていなかった。いやあ、よく掘り出したものだね」

角田氏の話を裏付ける別の証拠もある。

そもそも72年10月7日に「見解」が作成されたのは、同年9月14日の参院決算委での社会党議員の集団的自衛権についての質問がきっかけ。そこでは、角田氏の上司で「見解」作成の最高責任者だった吉国一郎法制局長官(2011年に死去)が、こう答弁しているのだ。

〈他国が――日本とは別なほかの国が侵略されているということは、まだわが国民が、わが国民のその幸福追求の権利なり生命なり自由なりが侵されている状態ではないということで、まだ日本が自衛の措置をとる段階ではない。日本が侵略をされて、侵略行為が発生して、そこで初めてその自衛の措置が発動するのだ〉(議事録から)

他国ではなく日本そのものが攻撃されない限り自衛の措置をとれないと、ハッキリ言っている。吉国長官は、こんな強い言葉も使っていた。

〈わが国は憲法第九条の戦争放棄の規定によって、他国の防衛までをやるということは、どうしても憲法九条をいかに読んでも読み切れない〉(同)

これらの答弁をまとめたものこそが、「見解」なのだ。

前出の小西議員は8月3日の参院特別委で吉国氏の答弁について横畠法制局長官を問い詰めたが、横畠氏は「72年当時の事実認識が、近時の安全保障環境の変化によって変わった」などと繰り返すばかりだった。小西議員がこう憤る。

「横畠氏は集団的自衛権の行使を認める論理は『見解』を作った担当者の頭の中にあったと答弁していましたが、吉国長官の答弁に加えて、角田氏本人の証言で、まったくのインチキが露呈してしまった。まさに法的安定性の否定そのものです。官僚たちとこの議論をすると、みんな青ざめて口ごもる。法案が違憲だとわかっているんです。安保法制は、安倍政権による事実上のクーデターにほかならない」

日本はいつから、こんなに〝危ない〟国になってしまったのか。

怪物・清宮 初アーチ「握りが見えた」驚異の動体視力

それにしても大物である。改めて紹介するまでもなく、早稲田実業の1年生、清宮幸太郎(16)である。

甲子園初戦(対今治西)の試合後、憧れの舞台に立ち、安打を放った感想を聞かれた清宮は、

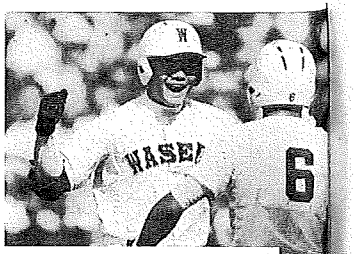
「甲子園は〝格〟が違いますね。ヒット一本ぐらい打たなきゃ示しがつかない」

そう言ってのけた。しかし、何より格の違いを見せつけるのは清宮自身だ。

各校が徹底研究し、清宮は弱点とされるインコースを攻め続けられた。相手投手のコントロールが狂えば体に当たる。初戦、2回戦と清宮は二つの死球を受け、3回戦の東海大甲府戦でも、第1打席は死球だった。

その日の試合前、東海大甲府の村中秀人監督は、怪物1年生を挑発するような発言を連発していた。

「インコースを攻めます。内の速いボールを打ち返したら、拍手しましょう。(高校時代に村中監督と同級生だった)原辰徳より上だ、とね。(身長184㌢で一塁の守備が不安視される清宮に対し)バントも狙います。ガハハハ」



発言自体が清宮の耳に入ることはないのだが、執拗な内角攻めにも怪物はびくともしない。そして無死一塁で迎えた第2打席、清宮は失投を見逃さず、ライトスタンドへアーチをかけた。

「(相手投手の)握りがチェンジアップぽかったんで狙いました。打った瞬間、入ったと思いました。映画みたいに、ちょっとの時間空白があって、ワーッという大歓声が聞こえてきた。想像していたのとはちょっと違う感じでした」

投手の握りを一瞬で確認して狙い打つとは、どんな動体視力をしているのか。

くだらない記者の質問にはさらりと答え、的を射た

完全保存版 高校野球100年 蘇る名勝負、永遠のヒーロー 好評発売中 定価2000円(税込) 朝日新聞出版

平成27年9月4日 参議院我が国及び国際社会の平和安全法制に関する特別委員会
民主党・新緑風会 小西洋之
出典：週刊朝日8月28日号より小西洋之事務所作成